

## 社会学部創立40周年記念連続講演会(2000年5月24日)

### 語り継ぐべきもの

—世代の連続・不連続—

木田 拓雄<sup>1)</sup>

**高坂** 関西学院大学社会学部は、今年創立40周年を迎えます。人間社会では、かつては30年を一代と捉えておりましたが、最近は寿命も伸びておりますので40年を一代としても良いのではないかと思います。人間の場合と組織の場合とでは若干違いがあるかもしれませんが、社会学部ができてから一代が過ぎました。そして今、新しい世代に突入しようとしています。

私達はこの記念すべき40周年を機会に、これまでの過去を振り返り、将来の刷新のよすがにしたいと思っております。連続講演会は、その試みのひとつです。

第2回目となります本日は、社会学部のOBである作家の木田拓雄さんをお迎えいたしました。タイトルは『語り継ぐべきもの』です。プリントにもありますように、木田さんは『秋の苦い光』という、全共闘世代の一面を描いた小説を執筆されております。全共闘世代を描いた小説は意外と発表されておられません。また、全共闘世代が学生諸君を含む様々な方々にメッセージを送るという場も極めてめずらしく、貴重な機会であると思えます。一代経った今、木田さんが何を語り継ごうとしておられるか、早速お話を始めていただきたいと思えます。

**木田** こんにちは。ご紹介いただきました木田です。この場に参りましたは実に30年ぶりですが、相変わらず学内は美しく、教室の中もほとんど変わっていないように感じられます。ただ、私が年をとったので当然なのですが、みなさんがとてもお若いので非常にびっくりしております。

私は現在、小さな出版プロダクションを営み、主にベネッセコーポレーションという会社の出版物を制作しています。発注元セクションは、“大

学生事業開発室”という、大学生に関わりの深い部署です。私のもうひとつの活動は作家なのですが、10数年前に新潮社から新人賞をいただき、それ以降作家活動を行っています。1997年に『秋の苦い光』という長編小説を角川書店から出版したのですが、この小説は、「我々の世代は果たして家族を作ったのだろうか？」という大きな問いかけをもって執筆したものです。多分、私を講師として招いていただきましたのは、そういう時代との関わりを書いたということが理由だと思えます。

私はみなさんの親御さんの世代より少し上ぐらいたと思えますが、私自身にも子どもがふたりおります。22歳と24歳ですので、多分私の話を聞けば、みなさんのお父さんやお母さんが、どのような大学生活を送ったのかということが、おわかりいただけるのではないのでしょうか。みなさんは、無意識のうちにご両親からいろんなメッセージを受け止めておられると思えます。それらのメッセージと私が今からはじめる話は極めて近いところにあるのではないかと考えています。

私は1965年から1970年くらいの間に学生生活を送りました。その時代がどういう時代だったかについて、数字とキーワードを並べてみなさんに想像していただこうと思えます。

まず数字を並べてみます。1965年に東京都の人口が1千万人を突破しました。都のテレビ契約者数が1千万人になり、日本全国における普及率は50%に達しています。大卒の初任給は2万5千円から3万円程度。これは正確ではありませんが、私が大学に居りました頃の授業料は、年間4万5千円くらいだったと思えます。それから8年後に卒業した友人に聞いてみましたところ、大学の授業料は7万円、初任給も7万円ちょっとだったそ

1) 作家

うですので、つまり、大卒の初任給で、大学の1年間の授業料が払えていたことになります。

当時の高校の進学率は85%。大学にいたっては30%に達していませんでした。クラスで10名くらいの人が中学校卒業後に就職しようとしていたわけですが、東京都が12万人の求人を募集したのに対して、地方から東京で働いてみようという人はたったの3万人でした。つまり、かなりの売り手市場だったわけです。

交通事故死はすでに1万人を超えており、今と同じくらいの数です。現在にないデータといえば、パソコン、携帯電話、テレビゲームなどくらいであり、ほぼ現代社会の条件が、この時期に整った、と考えていいと思います。

さて、次はキーワードを見てみます。“高速道路の建築ラッシュ”、“新幹線”、それから、今のみなさんにとって極めてお馴染みの“週刊誌”のほとんどがこの時期に創刊されていますので、週間誌もキーワードに加えるべきでしょう。また“国産自動車の誕生と輸出”、“テレビ”、“ビデオ”、“テープレコーダー”、“ファッションブーム”、“インダストリアルデザイン”、“団地ブーム”などがキーワードとしてあげられます。家庭の中ではリビングルームやダイニングルームといった言葉が非常に流行った時代で、一戸建ての家には、日本家屋の中で唯一の洋風空間である応接間があり、ピアノと白いスピッツのぬいぐるみかなんかが置いてありました。おそらくみなさんが、滅多に足を踏み入れさせてもらえない空間なのではなかったでしょうか。

これらの数値およびキーワードから当時の社会の様子が想像できるわけですが、おそらくこの時期に日本の都市生活というものが本格的に始まったと考えていいと思います。週刊誌やテレビ、ファッション、インテリアなどは、一人ひとりが内に籠るといって、それまでとは違った娯楽形態の始まりでもありました。

この当時の新聞を読み返してみても驚いたのは、飛行機事故、船舶事故、自動車事故、鉄道事故など、新聞のトップを飾るような、大きな事故が毎年のように起こっていることです。先ほど交通事故死の数が1万人を超えていたと申し上げましたが、当時の日本では1,300人にひとりしか

自動車を持っておらず、アメリカでは2,5人にひとりが自動車を持っていました。ですから、自動車の保有台数で割った事故率は、日本がダントツで世界一だったわけです。

これらを総合して見えてくるものは、この時代は近代化に向かって急速に、無理をしながら拡大していった時代だということだと思います。都会では、近代化の象徴である自動車やテレビを作るため、大量の労働者が不足していました。そのため、農村部を解体し、都会に人を寄せつける必要があったのです。農村から都市へ、近代化にともなう大量輸送時代がはじまっているにもかかわらず、インフラの整備が追いつかず、それが大事故につながった、というのが、事故の多さの理由だったのでしょう。

たくさんの矛盾が起こっていますが、大別すれば、矛盾は2つであるということができると思います。ひとつは先ほどの交通事故死のように近代化に伴った矛盾。もうひとつは不徹底な近代化によって起こる矛盾です。この2つ目の矛盾に私達の時代、すなわち70年代のはじめがぶつかったのだと思います。

この時代のありさまについては、当時の青春映画を見ていただければすぐにわかると思います。当時の日本では非常に勢いで映画が作られており、年間に300本ぐらいという、世界一多い本数の映画が製作されました。毎年12億人が映画を鑑賞しているという、すごい数です。

当時の映画の主人公の姿が極めて特徴的なのですが、金持ちと貧乏人しかおらず、中間層はまったく存在しません。その代表選手が吉永小百合さんです。吉永小百合さんと私は同じ歳なんです。彼女は貧しいほうのヒロインにも、金持ちのヒロインにも扮しています。貧しいほうのヒロインの場合は、彼女自身が工場労働者で、賃金の安さや劣悪な待遇などに非常に苦しめられながら生活を送っており、その中でなんとか良い生活を送るために頑張っている、というようなストーリーがほとんどです。映画の中でケンカや恋をするわけですが、そういうシーンの背景として選ばれるのは都会の中の田舎的空間、すなわち河原なんかですね。吉永小百合さんが夕日に向かって「バカヤロー、みんなきらいだ」と言うシーンはさすが

にありませんが、隣に本人がいるにも関わらず「光夫さん、愛してるわ」と川に向かって叫ぶといった、こそばゆい感じの映画が非常に多かったわけです。

一方、金持ちのヒロインの場合にはブルジョワジーの娘の役が多いわけですが、金持ち層なんてひと握りなので、シンパシーを抱く人間はほとんどいない。そこで、純粹に幸福な金持ちという設定ではなく、たとえば恋人がやくざだったり、車椅子の生活をしていたり、白血病にかかって治らないなどのマイナス面を背負わせているのです。

これが70年代の映画の主流といえます。一方で中産階級が出てきたことをうかがわせるような映画が、主に東宝系で製作されています。その代表選手が加山雄三さんです。彼の“若大将シリーズ”のシチュエーションは、老舗の店が繁盛して、やっとなら若大将が大学に行けるようになった、ということだと思います。大学生の若大将が車やギター、恋、スポーツなどで青春を謳歌していくわけですが、下からはい上がってきた中産階級が、ようやく貧しさを抜けて、楽しい生活をするというのが基本設定なのでしょう。たしか『エレキの若大将』がこの関学で撮影されたと思いますので、一度ご覧になってみると、私がお話しているのがどんな時代だったかが非常によくわかりになると思います。

さて、この時代には大学の中でもさまざまな矛盾が起こっています。関学では、1967年に薬学部を新設しようという動きが起こり、その資金のために1968年と1969年に学費を値上げすることが決まりました。それをきっかけに闘争が起こり、その時に登場したのが全共闘という組織です。私もその組織に加わるのですが、私たちが何に反対していたかという、第一はマスプロ教育です。当時関学において、新入生がある授業に出席しようとしたところ、人数が多すぎて教室に入れなかったという事件が起こりました。この事件がきっかけとなり、私自身も、マスプロ教育というものを意識するようになっていったのだと思います。

また、当時の大学では物事の決定のほとんどは教授会に委ねられており、学生には参加する機会が与えられていませんでした。そのため、もっと学生に参加させて決定権を与えよ、という運動が

起こったのです。大きくはこの2つが運動の争点だったと記憶しています。

マスプロ教育に対しては、先ほどの例からすれば、力づくで近代化を押しすすめようとしたはずみととらえることができます。もうひとつの学生参加の要求は、近代の未成熟といってもいいでしょう。私たちは、近代化そのものと、近代化の未成熟に対して反対していたわけですが、これら2つの矛盾を集約的に体现した学費値上げへの反対視点は、近代か前近代か、いずれに批判の力点をおくかによって、やや異なった2つの運動へと結実していきました。一方は、学費を値上げすれば貧しい家の人が大学に来られないじゃないか、といった論拠で反対するグループ（前近代化批判）であり、もう一方の近代化を批判するグループは、“教育の帝国主義的再編反対”というスローガンを掲げ、反対しようとしていました。このスローガンの意味するところは、大学は社会の要請に従い、さまざまな形で日本の資本主義を強くし、もう一度海外侵略をする協力をしているのではないか、ということです。

私自身はその当時4回生だったのですが、ほとんどものを考えない学生でした。若大将を真似たような楽しい毎日を送りながらも、大学生活には漠然とした不満がありました。それは、「大学とはもう少し知的なものじゃなかったのか。なんでこんなに面白くないんだろう」というものでした。そして薬学部を新設する計画がもち上がり、そのため、二年連続大幅に学費を値上げする問題が起こった時、この教室のこの場所で、はじめてみんなの前で話をしたのです。それは、「私は4回生だけど、4年間の大学生活はちっとも良いものではなかった。理由はよくわからないが、今ある状況を良くするためにお金を使うほうが、新しい学部を創るよりもいいのではないか」といったような内容だったと思います。冬休みの直前で友人たちのほとんどは就職が決まっていた。だから「おまえの言っていることは正しいと思うけど、そんなことしたら就職がフイになるから困る」と言って、誰も私と一緒に運動に加わろうという人はいませんでした。その時に私は、「どうして自分が正しいと思うことを表明すれば、社会は受け入れてくれないのだろうか」という素朴な疑

問を持ちました。おそらくそれは、今の社会でも同じ状況で続いているものだと思います。

私は現在、ベネッセコーポレーションの仕事を通して大学生のエントリーシートなどの添削を行っています。面接についての相談などもたくさん寄せられるのですが、どの学生も「面接の時に本当のことを言っていないのだろうか。教員になりたいけれど、“日の丸”や国旗はちっともいいとは思わないと、本心を明かしてもいいのだろうか」というような切実な悩みを抱えています。そういう点では、私が生きた時代と今とはちっとも変わっていないわけですね。

それぞれの人がどう生きるのかということ、  
“理念”として捉えた場合、私が考えたのは、“理念”というのは、突き詰めていくと個人の欲望や利害と衝突せざるをえないものだが、個人の欲望や利害を優先させ、理念をねじ曲げてしまうのは間違っているのではないだろうか」ということです。それと、「大学とは本来の“理念”や“理性的な生き方”を教える場で、それが教えられていないという現実が良くないのではないか」ということでした。現在では、“理念”や“理性”は物事を効率良くするためや、都合よくするために用いてはならない、という考え方もありますが、当時の私は“理性の手段化”というような言葉も知りませんでした。ただ、「理念的に生きるということが、個人にとっては公共的な立場をとるに等しい」という結論を、大学時代に得たのです。

先ほどのエントリーシートの例ではありませんが、本当のことを言ったがために内定が取り消されるといったようなことはみなさんにとって大きな問題ですので、とうていできないことだと思います。なぜなら、社会が公平なルールで動いていない時、個人が倫理的な生き方をするに何の意味があるのかという疑念を抱くからです。

みなさんは日常の中で、社会が不公平で、理念的な決定がなされずに物事が進んでいることばかりを目撃されていることと思います。それは経済を見ても、国際政治を見ても、日々の生活の中でもそうですが、特に日本の場合は、上に行けば行くほど平気でルールを破るとするのが当り前のようになっています。日本国憲法自体もそうです

が、自衛隊はまぎれもない軍隊であるにもかかわらず、いろいろな言葉を用いて、根本的なところでごまかしながら今日まできているわけです。

非常に身近な例として、日本とアメリカの野球の違いを考えれば、このことがはっきりすると思います。

かなり以前に、日本のプロ球界は、戦力を均衡にするために、ドラフト制という考え方をアメリカから導入しました。ウェーバー方式とって、弱いところから順番にいい選手をとって、ひとつのチームだけが強くなるようにしようという考え方から発生したものです。しかしこの制度は、強いチームにとって、当然自分のチームに不利益をもたらすものでもあるわけですから、そうなる平気でルールを破るチームが出てくるわけです。“職業選択の自由”といった理屈や、“空白の1日”“逆指名”などの抜け道を捜して実質的に骨抜きの状態にしながら、自分たちの利害と衝突することは絶対にしないでおこうというゴリ押しを通したのです。その親会社は、最も公共的でなければならぬ新聞社であるにもかかわらず、真っ先に公共的なルールを破り、自分のやり方をコミッショナーが認めないのであればリーグを出て、新しいリーグを作るといった脅しまでかけたのです。

私はあるチームのファンで、現在最下位なものですからこの問題に関してはどうしてもエキサイトしてしまうのですが（笑い）、現在の日本のプロ野球はこのようなルール破りを平然と行いながら、維持されています。自分の利害と衝突した時でも、理性を働かせてそれに従うといったような、真のルールづくりが全くできていないのが現状なのです。

みなさんは知識人の卵である大学生ですから、こういうことをお話ししているのですが、社会の中で理念的な立場を貫いていきますと、どうしても自分の利害や欲望に衝突します。その時に、社会と調整しながらベストな道を探ることが一番公共的な生き方だと思うのですが、それを実現するためには社会のシステム自体を変えなければなりません。そのためにはみなさんのような知識人の卵が、いろんな所で敗北を承知で戦いながら、その気運を高めていくしかない、私は痛感してい

るわけですから。

みなさんは社会に出られたら、非常に高い給料を得られることでしょうか。大学で身につけた情報の処理能力やすぐれた理解力を発揮し、豊富な知識によって人脈を作りながら会社に貢献していかれることと思いますが、本来の知識の在り方はそういうことだけではなくて、社会のシステムそのものを変えていくというような理念的な生き方をすることだと思います。すなわち、今と同じような社会のルールの中で生き続けていくことは、知識人として生きていくことにはならないということです。言葉を変えれば、大学にきた意味がないといえるでしょう。

現在、世界の中で一番大きな問題となっているのは“富の集中と貧困”、“過疎と過密”、“生産地と消費地の経済格差の増加”といったようなことです。

みなさんもお承知のように、海老の消費率が高いのは歴代世界中で一番豊かな国であり、日本は数年前からダントツのトップです。世界中の海老の産地をまわって乱獲させ、なくなったら、そこを捨て次の産地へ向かうというやり方で、日本の食卓へ海老を運んでいます。しかし、日本の食料の需給率はたったの41%であり、エネルギーにいたっては10数%ですから、もし世界中の海が安全に航行できなければ、たちまち私たちは海老が食べられないどころか、死滅してしまうわけです。世界の海を管理しているのはアメリカで、日本は今のところ、アメリカの軍事力にのっかって安全に航行するという方法をとっていますが、果たしてこの方法が良いのかどうかということもひとつの問題です。

軍事力に頼り、自前で調達できない食料などを海外から仕入れるのでないもうひとつの方法は、相互に依存しあうパートナーとしての関係を作ることです。私は経済学者ではありませんので素人考えですが、生産地と消費地の格差を減らしていくような方向で経済を成り立たせていけば、この関係が成り立つのではないのでしょうか。海老の問題に戻りますが、日本では食材としてだけではなく“海老キャッチゲーム”やパーティーの盛り付けなど、パフォーマンスとして使われていることが多いと思います。また、レストランでは毎日大

量の食べ残しを捨てています。このような食べる以外の目的で使われるものや、食べ残しの回収費をすべて税金として課し、それを産地に全額還元するという方法をとれば、格差は徐々に縮まってくるのではないのでしょうか。それが一番うまくいっているのが石油で、生産地と消費地との経済水準とがほぼイコールになっています。アメリカが石油価格への介入をやめれば、もう少し大衆のレベルまで富は広がっていくでしょう。

海老の生産地のひとつであるインドネシアと日本とを比べますと、消費地である日本がインドネシアの30倍も40倍も豊かであるのが現状です。しかし、消費地の利益を生産地に還元していくという方法をとれば、これらの格差をある程度是正することはできるはずです。このような発想が、先ほど申し上げました理念的な考え方なのです。

これは空想的な話ではなくて、今現在も行われていることです。たとえばドイツに行きますと、コーヒーが非常に高い喫茶店があります。それは、コーヒー豆の値段を国際流通価格に頼らずに、独自に算定して高く払っているからなのです。日本の中でもそういう運動を行っているところはあります。

市場経済というものは、必ず強いものが勝つようになっていきます。しかし、強いものが勝つばかりでは駄目なので、弱いものにも平等のチャンスを与えるためには、ある程度の規制を働かせる必要があります。コーヒー豆の場合には、強いものが自発的に弱いものとの関係を取り結んで、“強い”と“弱い”を分業の関係にするという考え方が存在しています。寄付などもそのひとつですね。これは、マッチョな市場経済に慣れている人間にはちょっと気持ち悪い考え方もかもしれませんが、強いものがわざと高い代価を払って、弱いものとの間に新しい関係を取り結ぶことであり、このような方法が今現在求められているのではないのでしょうか。

これは別段難しいことではなく、いろんな場所でさまざまに実践できることだと思います。みなさんは大学を卒業して社会人となり、同時に消費生活者として生きていくわけですが、みなさんたちが、知識人の卵としてふさわしい行動を実践し、繰り返してゆくことによって、社会システム

が徐々に変わっていく可能性があります。みなさんには、そのような役割を担っていただかなければならないのです。

では、どうして日本の社会がこのような仕組みになりにくいのでしょうか。私は言葉を考える人間として“日本語”という世界の中でこのことを考えてみたいと思います。

実は、日本語というのは、このような理念的な生き方を選択しにくい仕組になっているのです。アメリカでは大学に入っても4年間ずっと“英語”の授業がありますが、日本では大学に行きますと“国語”の授業はなくなります。アメリカで研究を行っている友人にそのことを訊ねてみると、「英語の仕組みと社会の仕組みはイコールであり、英語を学ぶことは経済や政治の仕組みを学ぶことにもなるので、大学でも最後まで英語を学ばせるのだ」と言われました。これは英語というものを考えた場合、非常に明解な答えだと思います。では、果たして日本語はそのような仕組みになっているのでしょうか。大学生が日本語を学ぶ時、このような学ばせ方ができるのかどうか、大学の教育の問題として考えていかなければならないと思います。

一般的に英語は“誰かが居て、何かの動作をする”といった形になっています。これを社会の文脈で言いますと、“ある人が何かを意思し、自己実現していくために言葉はある”、“それと同じように、自己実現していくために経済もあり、政治もある”といったように、どれもイコールの関係で並んでいます。ですから、言葉を学べば学ぼうと、社会を理解しやすくなるといった構造になっているのです。

一方、日本語はどのようになっているかを考えてみますと、まず日本語というのは主語が非常に曖昧です。つまり、相手に合わせて主語が変わるといのが、日本語の大きな特徴なのです。英語のようにきちっとした主体があって、その主体が自己実現するために言葉を使うという構造にはなっていません。相手の要望に合わせて変容可能であるところで、日本語らしさというものは成り立っているのです。

大学生のみなさんがエントリーシートなどを記入する際、この日本語の機能を非常に弱いかたち

で使っている方がたくさんあります。具体的に申し上げますと、自己PRなどの文章では、ほとんどが誰かの言葉を借りて自分を褒めているわけです。「僕はクラブの部長をしています、みんなから責任がある人間だと言われています」とか、「アルバイト先では、君はよく働くから店長にならないかと言われます」などなど。私なんかは「ほんまかいな？ みんなに聞いてみ」と言いたくなりますよ（笑い）。このように、自分自身ではなくて、周りの言葉で自分の存在を確認しようという傾向が非常に強いのが特徴です。

これは日本語の主語がいくらでも変容可能ということにもつながると思いますが、このような形で言葉を使い慣れていくと、内容にも影響を及ぼしてきます。なぜなら、相手に非常に気を使っているものと言うとか、相手の目に映った自分が「自分」であるという形で、対人関係を構成しているからです。けれども、相手は常に変わっていくわけですから、Aさんが見た自分を「自分」だと思っていたら、Bさんは全く違ったことを言ったり、Cさんはまた違うことを言う。このように、相手に合わせて自分を形成しようとしてどんどん変えていくうちに、一体自分は誰なのか、何なのかわからなくなってしまう人が非常に多いのです。「人に気を使うことが私の長所です」と書いている人ほど、その内容を読んでいくと、病的なほどに相手に合わせて自分をどんどん変容させ、自分というものをなくしてしまっている人が多いですね。これは、先ほどの理念的な生き方から、かなりはずれていると思います。

日本語の構造を考えた場合、一番の特色は“均質性”だと思います。これは日本の社会全体にもあてはまることですが、全員が均質であるということが条件の言葉なんです。主語を語らなくていい、ということもそうですが、“私”はすぐに“あなた”になりますし、“私たち”にもなるのです。“花”と言えば“梅”の花、“山”と言えば“香具山”というように、ひとつの単語を口にすると、全員に同じ情感が流れるという範囲の言葉でしかなかったわけですね。

現在社会が拡大し、地球規模のコミュニケーションが求められているにもかかわらず、これと同じような言葉の使い方がなされており、学生さ

んの文章を見ても、仲間うちでしか通用しない低い抽象度でしか文を成立させていない人が目立ちます。言葉は、ある抽象性を持たなければならぬわけですが、それが無いのです。

おそらくこれは、中国から日本語の表記を取り入れた時から現在に至るまでの大きな特色であると思いますが、そのひとつに“仮名”があります。たとえば“あ”という言葉を考えて場合、中国語にはたくさんの“あ”があったわけですが、日本語に取り入れる際に、たったひとつの“あ”に変えてしまいました。つまり、曖昧で異質なものはすべて排除して、非常に単純化したかたちで物事を受け入れるというのが、日本語の基本的な特色なのです。

このことはみなさん方もよく知っておく必要があると思います。なぜなら、“私”がすぐに“あなた”に、“私たち”に横すべりするような言い方には、主体がないわけですから、当然、責任もなくなってきます。日々耳にする言葉に、政治家や官僚が述べる「はなはだ遺憾ですが……」というのがありますが、これは見事なほどに責任がない言葉です。

このように、責任が生まれにくいというのが日本語のもうひとつの大きな特色です。責任が生まれるためには、まず主体があって、それが何かを意欲して原因と結果が生まれるという構造が必要なのですが、日本語の場合は主体は相手によって作られますので宙に浮いたままです。しかも“私”と“あなた”がイコールという形で言葉を使っていますので、そこには責任が生まれてこないわけです。

その典型的なものが「ありません」という言葉です。何かを探しに行き帰ってきた時に、「なかったよ」というのは、日本語として極めて普通の言い方ですが、外国人には全く理解できない言葉です。英語の文脈で言うなら、「私は探すことができませんでした」となります。そして、「探すことができなかった」というところにふたつの責任が発生します。まず、「お父ちゃんが『ある』と言うから行ってみたけどなかったよ、お父ちゃんが間違ってる」という風に相手に責任を帰すか、「行ってみけど、私はよう探さなかった」という風に自分に責任を帰すか、いずれかに責任

の所在がはっきりするわけです。しかし、「ありませんでした」というのは、あたかもモノが悪いかのように、モノに責任を押し付ける使い方です。これが、非常にポピュラーな日本語の使い方なのです。

4～5年程前に、俳優の勝 新太郎が麻薬所持で逮捕されましたが、あの時の記者会見で彼は、「どうしてかわからないけど、パンツの中にあっただよなあ」という言い方をしました。そして記者から「勝さん、それであなたの責任をどうするんですか？」と質問されたら、「これからはパンツを履かないようにしようかなあ」とも言っていました。これも、日本語の極めて特徴的な構造を巧みに使った言い方だと思います。

このような表現は、それほどまでに私達に深く染みついているわけですが、私はそういう日本語の使い方から脱却することは可能だと思います。非常な努力は必要ですが、みなさん方には知識人として、この日本語の使い方を変えていくことが必要なのです。これは決して難しいことではありません。

私は大学の2年生ぐらいの時に、4つのことを自分に課すようにしました。1つ目は“自分自身に嘘をつかない”、2つ目は“一番醜い部分も自分であり、それを自分の一部として認める”、3つ目は“もし自分が間違っていたら、それを訂正する”、4つ目は“自分が嫌いな人間からは嫌われよう。評価されないでいよう”です。この4つのことを毎日実践しようと考えました。きっかけとなったのはスタンダールというフランスの作家ですが、彼は毎日自分がどのように生きていくかを考えるためにいくつかの誓いをたて、その誓いの言葉を服の中に縫い込んで、その日一日はそれを実践しようとしていたわけです。私もそれを真似、毎日このことだけはやろうと決めて、実践していました。

たとえば、1つ目の“自分自身に嘘をつかない”は具体的にどういうことかということ、友達から「この服似合う？」と聞かれたら、あなた方は必ずそれを自分の心に一度問いかけて、似合うと思うなら「似合う」、似合わないと思ったら「似合わない」と言わなければなりません。これは簡単なようで結構つらいことです。そして、自分の

言葉に一番ぴったりの言葉をいつも探しながら、自分の心と釣り合う表現を見つける訓練を毎日行わなければなりません。過剰でも過小でもだめなのです。特に女性に多いですが、感動したということ表現する時には、いつも「鳥肌が立った」という言い方しかしない人がいますが、これでは心が枯れていきます。自分が動かされた心の質にふさわしい言い方をいつも心がけて、自分の心に嘘をつかないという訓練を続けていけば、さきほどの責任のない日本語の使い方から脱却できます。

私の友人に『犯罪友の会』というグループで演劇活動を行っている人がいます。時には野外演劇場で、丸太を何千本も組んで公演することもあるのですが、公演が終了するとお客さんに挨拶するために出口で待っていて、いつも私に感想を聞きます。私にとってはそれが一番つらいんですね。これだけ一生懸命やったんだから、面白くなくても「面白かった」と言ってあげたいのですが、だめな時は「だめ」という。そこで負けてはだめなのです。そのための訓練を積むことが大切だと思います。

みなさんは美術館によく行かれると思います。私は美術館に行くとき非常に観てまわるのが早く、いつも外でポーッと連れを待っていることが多いです。私は美術館に感動しに行こうという気はありません。全部を観る中に、きっと1枚か2枚は面白い絵があるだろうから、それが向こうから来るまではさっさと通り過ぎるのです。私は絵のプロではありませんし、観賞の仕方をよくわかっているわけでもありませんが、私に感じられるかどうか、つまり自分の心に忠実かどうかを大切にしています。敢えてわかろうとしたり、感動しようとして自分の心を操作しないようにしています。そういう方法をとっていると、本当にいいものはわかってきますので、それはじっくりと観ます。ピカソやマチスなど、どんな作家でもよくて3割です。その中で自分に合うものは1割だと思ってください。

これはみなさんが友達と付き合うときにもあてはまることですが、人の目に自分がどう映るかといった付き合い方とは全く逆の方法です。自分を全部投げ出して、100人のうちひとりでも自分を

好きになってくれればいいじゃないか、という考え方をすることです。「自分はこう思う」ということを主張して（それが自分そのものなのですから）、その自分の本質が人から嫌われても仕方がないし、冷たい人間だと言われても仕方がないわけで、それを自分の一部として受け入れればいいのです。

あとの3つはよくおわかりいただけることだと思います。2つ目の“一番醜い部分も自分であり、それを自分の一部として認める”ということですが、たとえば2日酔いの朝に「なんと自分は愚かなんだろう」と悔いたとしても、前夜の愚行も自分の一部として認めるということ。自分は心が温かい人間だと思っているのに、誰かから「心が冷たい」と言われたら、自分の心にも冷たい部分はあると認めて受け入れればいいのです。

これらは、強い主体、強い自分を確立するための方法です。この方法では、尺度は自分の方にあるわけですから、自分が判断し、責任を持って選んだものを最後まで押し通すことによって、他者から嫌われても仕方がないと、受け入れることができるようになります。これが、“理性”や“理念”を自己の利害と衝突させながら生きていくという生き方につながってくるわけです。もちろん私達が生きていく中では、言葉だけが悪い状況を生みだしているわけではありません。いろんな所で解決不可能な問題がたくさん生じていますが、その中でも大きな問題となっているのがジャーナリズム、マスコミュニケーションの問題です。

みなさんが言葉や知識を使うのは、自分というものの存在、自分の意見をできるだけ普遍的なものにするためであり、他人と出会い、話すことによって共通の場を作り、共に生きる可能性をさぐるためであるはず。その時に、メディアという大きな問題がからんでくるわけですが、常に正しいものが普遍的であるかといえば、その逆であるのが現代のメディアの特色だといえます。

メディアは非常に多数の人間に支持されることで成り立っていますが、先程からお話ししている知識人の生き方というのは、正しいがだれもが実践できることではありません。ところがメディアは、正しい、正しくないより、人の支持をどれだけ多く集められるかに、主要な関心があるため、

正しいものは、しばしば切り捨てられてしまいます。メディアの本質は、人々の心情やイメージ、情緒に訴えかけて、絶対多数のものに合うメッセージを送っていく方向に傾きがちなのです。そこで問題となるのは学問との間に接点が多いことですが、学問は理性的な態度によって“真実”を目指していくものですが、メディアが一番大切にしているのは“真実らしさ”なのです。この、一見ちょっとした違いが、実は大きな開きとなっていくのです。

私が執筆した『秋の苦い光』という小説の初版は4千部です。私としては人間としての普遍的なテーマを描いていると思っているのですが、同じ頃に郷ひろみの『ダディ』という小説が出版され、これが200万部売れました。「それは当然や」と言われるかもしれませんが(笑い)、これがメディアの本質なんですね。そこに真実があってもなくても、多くが売ればいい、というのがメディアのルールなのです。だから、普遍性というものを、支持する数の多さで測ろうとするメディアの考えをおし進めると、真実からはどんどんかけ離れた方向へいく可能性があります。しかし、社会にはもちろん、真実を描きながらも多くの人々の支持を集める作品を求めようとする人も多くいます。『秋の苦い光』という小説が、どういう経緯で出版されたかをお話しすれば、少しは救いがあるということがおわかりいただけると思います。

みなさんの中にも出版に興味を持っている方は多いと思いますが、関西という不利な場所で、角川書店や集英社という出版社から本を出すことが、どういうことなのかを少しお話ししたいと思います。

私の小説は、友人を介して集英社と角川書店の2社に持ち込まれました。両社から「興味がある」と返事をもらいましたが、集英社の返事は「これは非常に面白いけれども、上下巻にしてそれぞれに2,300円以上の価格をつけないと採算が合いません。そのためには20の部署の人から判をもらわなければならないので、約半年ほど時間がかかります。それでも出版できるとは限りませんが、よろしいですか?」というものでした。私は、それはちょっと長すぎて待てないと思ったので、集

英社の方は、それ以上話が進みませんでした。

一方、角川書店の出版のシステムはこうでした。角川書店では、月末の最終日に社長面前企画会議が行われ、そこでどんな本を出すかが決定されます。まず編集部の中で私の小説がいいと思ってくれた編集者がふたり居れば、この会議にかけることができます。この会議には営業や広告などすべての部署の責任者が出席しており、全員で編集者の提案を検討し、討論して、最後に社長が決済すれば、即決定するわけです。こういうシステムは日本では非常に珍しいと思います。大抵は書類を回して、それぞれの責任者が判を押しているうちに、いつのまにか責任の所在がはっきりしなくなってくるのが普通ですが、角川書店の場合は、全員の場で社長が即決するというシステムをとっているわけです。

これとよく似ているのが新潮社の新人賞だと思うのですが、私の時には応募総数が1千部を超えたそうです。原稿用紙に書かれた小説が1千部を超えると、6畳の部屋が天井まで埋ってしまうらしいのですが、どういうやり方をするかという、まず編集部とアルバイトを含めた100人ぐらいの人が、端から1部ずつ取って読んでいきます。そして、“自分は絶対にこれがいい”というものだけを選んで、それを持ち寄ります。その次に、編集員全員が集められた100部すべてを読んで、“これは”というのを選び、その中からさらに何編かをセレクトして選者に渡し、最終的には選者が選ぶというスタイルをとるわけです。

このシステムのどこか良いかという、まず基本にはあるひとりの人間の“思い込み”(真実)があります。この“思い込み”は、何かを行う時にはとても大事なことです。次に、全員がそれを読むことによってふるいにかけ、その人の“思い込み”が、個別的なものではないか、多数の人間に受け入れられる普遍性をもつかを修正する機会が設けられています。この両方があることが大切なのです。

このようなシステムが、現代の社会の中で、あるいはマスメディアの中で働いておけば、それほどひどい問題は起こらないのではないかと思います。現代のような非常に生きにくい時代においても、中にはこのような機能を働かせているところ

もあります。マスメディアの問題というのは、あまりにもたくさんの人の手を介しているために、個人の働きかけは全く無力じゃないかという気にさせてしまうところだと思いますが、社会の中には個人の普遍性をもう一度救い直そうという動きも少しながら存在しています。私達はそれに希望を託しながら、生きていかなければならないのではないかと思います。

現在の私達は、地球環境の問題や原子力エネルギー、バイオなど、解決不可能な問題をたくさんかかえています。ちょうど癌細胞がそうであるように、あるものを成長させることが、あるものの死を早めることにもつながる場合があります。良い細胞を成長させる力は、悪い細胞も成長させてしまうからです。つまり、悪いものをたたくには、良いものもたたかざるをえない。悪いものをつぶすことは、良いものもつぶしてしまうことになるという構造が、私達が今おちいっている構図だと思います。

これらについては、あまりにも多くの人を介して問題が成り立っていますので、自分ひとりがやっても仕方がないのではないかという無力感も起こってくると思います。

人類が抱えているもうひとつの大きな問題は、もはや自然のエネルギーや自然の動植物の生育だけをあてにしていたのでは、これだけ多くの人間を維持していくことが出来ない状況に至っていることです。もし原子力エネルギーを放棄することで、今の半分の人間が死んでいかなければならないならば、私たちは、原子力エネルギーと共存する道を選ばなければなりません。

私達は、悪いとはわかっている、それを行わなければならない社会の中に生きているのです。このことを象徴的に表しているのが、聖地エルサレムをユダヤ教徒とイスラム教徒とキリスト教徒が共有しあっていることだと思います。どこかがそれを占有してしまえば、他のすべてが立場を失うという世界の中であって、いわゆる“原理主義”のように自分達だけが正しいという形で内閉してしまうか、真実はどこにもなく何もかもが相対的だという考え方かのいずれかしかないような世界に、私達は構造づけられているのです。

今日の話の締めくくりとなりますが、私達は

“第3の道”を考えてみるべきだと思います。それは、常に自分の立場を他者に向かって開き、普遍性を目指しながら、他者と出会った時にはいつでも調整可能な形で世界を見ていくことです。つまり、普遍性は自分が述べた内容にあるのではなく、常に普遍的なものを目指して自分を解体しながら前を進んで行く運動そのものが普遍的であるというところに、最終的に行き着くのではないのでしょうか。

このことは、若い人ばかりに関わる問題ではありません。主に私達の世代が頑張らなければならないことで、私達の世代こそが日本の中に公正なルールを打ち建て、自己実現ができる社会を作り直していかなければならないのです。

これからたくさんの可能性を持ったみなさんも、これらのことを心に留めて、頑張っていただきたいと思います。

**高坂** ありがとうございます。では、質義応答の時間を設けさせていただきます。

〇〇 先ほどのプロ野球の話ですが、巨人軍の問題はオーナーである渡辺社長の独断が球界をだめにしてしまうと断言できると思います。

また、マスコミ全体の問題として気になるのは、恐るべきことに現在の日本に言論統制、いわゆる圧力が存在するのではないかということです。たとえば、小淵前首相の病床での青木官房長官との対話ですが、単に1対1だけで、しかもあの状態で本当に言葉が交せられたのかどうかは、根本にせまる問題だと思います。後の国会での首相継承は合法的だといわれても、肝心な首相代理が病室で話し合われて決まったことに、非常に疑問を感じます。少なくともあれだけの重病人であれば、万一急変した場合を考えて主治医ひとりだけでも傍に在るべきであり、公平な第三者の立ち会いのもとに話がなされたのかということが、確認されるべきだったのではないのでしょうか。

このことは、現代の政治の貧困に尽きると思います。そして、そのことがだんだんと軍国主義に逆戻りしつつあるのではないかと心配しているわけですが、そのあたりについてはいかがお考えでしょうか。

**木田** 今の質問の答えになるかどうかはわかりませんが、今回の件に関しては、皇族つまり天皇家と、首相であった小淵氏との“公け”の違いを痛切に感じました。

天皇というのは公的に非常に手厚い医療管理をされており、最高のもてなしを受けているわけです。一方、国権の最高機関で、私達の最高責任者であった小淵前首相には公的な健康チェックが行われておらず、家族と本人だけで健康管理を行っていたわけです。これを考えた時、私は日本の公けとはなんだろうか？と感じました。昭和天皇が亡くなった時には、下血が何リットルであるとか、その病状が克明に報道されていましたが、小淵氏の場合は一切ありませんでした。つまり、日本の公けは国会や内閣総理大臣にあるのではなく、天皇家や皇族にあるのではないかということが、先日の森首相の神の国発言とも結びついているのではないかと思います。

**高坂** ありがとうございます。今日のお話は大変面白く、示唆に富んだ内容であったと思います。木田さんのおっしゃったことは「それぞれが自分自身を強くし、確立して理念的に生きろ」という言葉に要約されるのかもしれませんが。私としては、「社会学部は理念的に生きるぞ」と申し上げたいところですが、社会学部という人間が実際に存在しているわけではありませんので、社会学部を支えている一人ひとりの学生、教職員が、社会学部の理念を支えていくのだと思います。

ドイツの哲学者にヴァルター・ベンヤミンという人がいますが、「私達は、未来の世代にばかり責任を持っているだけではなくて、過去の世代にも責任を持っている」と語っています。今日のお話も、私達一人ひとりが未来に対してだけ責任を持っているのではなく、過去に対しても責任を持っているのだというメッセージをではなかったかと感じています。

大変貴重なお話を、ありがとうございます。